

発達部門(乳幼児)

最近1年間における乳幼児研究の動向と展望

野 呂 正
(宮城教育大学)

1. 資料と分析の視点

本稿でとりあげた資料は、次の3学会の1985年度総会並びに大会発表論文集である。

- ・日本教育心理学会第27回総会発表論文集
- ・日本心理学会第49回大会発表論文集
- ・日本保育学会第38回大会研究論文集

これらの論文集の中で直接、分析の対象となった資料は、乳幼児を研究の被験者として扱った全ての心理学的発表論文である。日本保育学会(以下、日保と略す)での発表論文については、筆者が心理学的研究と判断したものを抽出した。しかし、何を基準として心理学的研究とみなすか、その判断の作業は、きわめて難しかった。そこで、ここでは、専門の心理学用語が必ずしも使われていなくとも、乳幼児の行動が扱われている研究は、全て、資料としてとりあげることにした。したがって、論文集の中で「発達」と分類されている部門と並んで「保育内容」の部門に属する研究の多くがとりあげられている。

また、本稿で分析の対象となった資料の中には、障害幼児を扱った研究が全て含まれている。

結局、日本教育心理学会(以下、日教心と略す)からは181件、日本心理学会(以下、日心と略す)からは91件、日保からは275件、合計547件の研究発表が本稿での分析資料である。

これらの資料は、次のような視点から分析された。

- ① どのような研究領域に関心がもたれているか。
- ② どのような研究方法が用いられているか。
- ③ どのような年齢層の乳幼児が被験者として扱われているか。
- ④ 事例研究で扱われる被験者の人数及び追跡期間はどれくらいか。
- ⑤ どのような研究体制のもとで研究が行われているか。

2. どのような研究領域に関心がもたれているか。

この1年間において乳幼児を被験者として扱った研究領域はどのようなものであったか、どの領域が、とくに研究者の関心を惹いていたか、という観点から、全資料

を概観し、次のような研究領域を分類カテゴリーとして設定した。

- ① 身体・運動……保育内容「健康」の領域で扱われるもの。
- ② 認知……感覚、知覚、記憶、思考、知能を扱ったもの。
- ③ 言語……保育内容「言語」の領域に関わるものだが、この中には「絵本」も含まれる。
- ④ 学習……直接、学習の問題を扱ったもの。
- ⑤ 表現……保育内容「絵画・製作」と「音楽リズム」の領域に関わったもので、この中には身体表現及び言語表現は含まれない。
- ⑥ 人格……感情、動機づけ、気質、性格を扱ったもの。
- ⑦ 社会的行動……対仲間関係の中での子どもの行動。遊びは含まれない。
- ⑧ 遊び……遊びそのものの発達や遊びと他の心理機能との関係などを扱ったもの。
- ⑨ 生活構造……子どもの生活時間や生活リズムなど生活構造を扱ったもの。
- ⑩ 家族関係……母(父)子関係、きょうだい関係等家族の中での乳幼児の対人関係を扱ったもの。
- ⑪ 保育効果……集団保育の効果や各タイプの保育形態の効果を扱ったもの。
- ⑫ 保育者特性……保育者の資質や意識・能力を扱ったもの。
- ⑬ 臨床・障害……障害幼児及び幼児の問題行動を扱ったもの。
- ⑭ 発達理論・研究方法……発達理論や研究方法を研究対象として扱ったもの。

学会別に、各研究領域での発表件数を示したものがTABLE 1である。ここから次のような特徴をよみとることができる。

1) 3つの学会での乳幼児に関する研究発表の件数は、総計で547件、その中、日教心では181件の33.1%、日心では91件の16.6%、日保では275件の50.3%で、日保での発表件数が全体の半分以上を占めている。

2) 発表件数の研究領域別傾向を見てみると、「社会的行動」を除いて、日教心と日心とでは、各領域、ほぼ類似した発表率を示しているが、日保は若干、独自の傾向を示している。つまり、日保では、「身体・運動」「遊び」「保育者特性」「表現」に関する発表が他の2つの学会にくらべると顕著に多い。他方、日教心、日心にくらべて顕著に少ない領域は「認知」「家族関係」「臨床・障害」である。

TABLE 1 研究領域別発表件数 ()の数字は%

研究領域	日本教育心理学会	日本心理学会	日本保育学会	計
身体・運動	0(0.0)	1(1.1)	33(12.0)	34(6.2)
認知	31(17.1)	18(19.8)	17(6.2)	66(12.1)
言語	27(14.9)	11(12.1)	33(12.0)	71(13.0)
学習	6(3.3)	4(4.4)	0(0.0)	10(1.8)
表現	5(2.8)	1(1.1)	21(7.6)	27(4.9)
人格	9(5.0)	5(5.5)	9(3.3)	23(4.2)
社会的行動	25(13.8)	4(4.4)	19(6.9)	48(8.8)
遊び	9(5.0)	5(5.5)	41(14.9)	55(10.1)
生活構造	1(0.6)	0(0.0)	7(2.5)	8(1.5)
家族関係	19(10.5)	10(11.0)	16(5.8)	45(8.2)
保育効果	1(0.6)	2(2.2)	13(4.7)	16(2.9)
保育者・養育者特性	4(2.2)	5(5.5)	30(10.9)	39(7.1)
臨床・障害	40(22.1)	20(22.0)	30(10.9)	90(16.5)
発達理論・研究方法	4(2.2)	5(5.5)	6(2.2)	15(2.7)
計	181(33.1)	91(16.6)	275(50.3)	547(100.0)

こうした学会の違いによる発表領域の違いは、おそらく、学会構成員層の違い(日保においては幼稚園、保育所など現場保育者の占める率は他の2つの学会よりも著しく多い)、及びそれと関連して、問題意識の違い(日保においては、現場での実践と直接結びついた研究が目立つ)が関係していると考えられる。

3) 「認知」「言語」「学習」の知的領域での発表件数と「社会的行動」「遊び」「家族関係」の対人関係に関わる領域及び「臨床・障害」の領域での発表件数が顕著に多く、全体の70%を越えている。

4) 最近、教育・保育現場やジャーナリズムにおいてしばしば取り上げられる今日的問題に関する心理学の側からの実証的研究は必ずしも多くない。すなわち、子どもの生活リズムの問題に関わる「生活構造」領域での研究は、全体で僅かに8件、1.5%に過ぎない。また、教育・保育制度の改変に関わる「保育効果」に関しては、全体で16件、2.9%と少ない。しかし、保育者の資質や意識、能力に関わる「保育者特性」での研究発表は、全体で39件の7.1%で、やゝ多く、その中、30件は日保での発表である。

5) 研究領域別に、その内訳の特徴を以下で概観して

みよう。

①身体・運動

「身体・運動」の領域での発表は、全体で34件で、全発表件数の6.2%である。この領域に関しては、日教心、日心ではほとんど関心が向けられていない。34件中、日保で33件を占めている。

この領域の内訳は、TABLE 2 に示される。

全体として、保育実践の中での全身を使った実技に関わる研究が多い。水泳、跳び箱、縄とび、竹馬、鉄棒、ブランコ、スキップで全体の50%を占めている。

他方、はしの使い方など、細かい手指操作に関する研究も行われている。

なお、脳波や心拍数など生理学的指標を用いて幼児の行動をとらえようとする研究は、数は少ないが、今後、増加するのではなかろうか。

TABLE 2 「身体・運動」の研究分野

()の数字は%

研究分野	日本教育心理学会	日本心理学会	日本保育学会	計
実技			17(51.5)	17(50.0)
手指操作			4(12.1)	4(11.8)
脳波、心拍数		1(100.0)	2(6.1)	3(8.8)
環境と運動・健康			2(6.1)	2(5.9)
運動あそび			2(6.1)	2(5.9)
身体発達			2(6.1)	2(5.9)
運動能力の要因			1(3.0)	1(2.9)
身体意識			1(3.0)	1(2.9)
移動行動			1(3.0)	1(2.9)
運動能力検査法			1(3.0)	1(2.9)
計		1	33	34(100.0)

②認知

「認知」の領域では TABLE 3 に示されるように、「数と図形・空間」の分野が最も多く、30.3%を占めている。ついで、「思考」の分野で25.8%で、この2つの

TABLE 3 「認知」の研究分野

()の数字は%

研究分野	日本教育心理学会	日本心理学会	日本保育学会	計
知覚	3(9.7)	5(27.8)	4(23.5)	12(18.2)
探索	3(9.7)	1(5.6)		4(6.1)
記憶	4(12.9)	2(11.1)	3(17.6)	9(13.6)
数と図形・空間	11(35.5)	3(16.7)	6(35.3)	20(30.3)
思考	6(19.4)	7(38.9)	4(23.5)	17(25.8)
知能	2(6.5)			2(3.0)
自己の認知	1(3.2)			1(1.5)
シンボリズム	1(3.2)			1(1.5)
計	31	18	17	66

分野で、いずれの学会も55%を越えている。ここでは、乳幼児期を感覚運動期、前操作期と特徴づけたピアジェ型研究が主流を占めている。

「知能」分野の研究は少ないが、その中で、知能(IQ)が、ここ30年間にわたり、どう変化してきたか、そしてその変化の要因を5699名の幼児を対象として追究した萩原英敏、内田純子の研究「知能発達の経年的変化に関する研究—その1、その2」(日教心)は、その労苦の点からも注目されよう。

なお、この領域での関心の高さは、シンポジウム「幼児の知的教育はいかにあるべきか」(角尾稔、祐宗省三、宮本美沙子、松原達哉、津守真、南館忠智、大橋和子)が日教心で開催されたことにも反映していよう。

③言語

「言語」の領域での発表は、全体で71件で、全発表件数の13%を占めている。

TABLE 4 に示されているように、この領域は、その内訳の研究分野が学会によって違いがみられる。日教心では「文の理解・文法」と「語彙」に関する分野が際立って多いが、日心では「乳児の泣き声」「初語言語発達」の分野が上位を占め、そして日保では「ことばのやりとり・伝達」と「絵本」の分野が顕著である。全体的には、「ことばのやりとり、伝達」「絵本」「文の理解・文法」の3分野で全体の45.5%を占めている。

TABLE 4 「言語」の研究分野 ()の数字は%

研究分野	日本教育心理学会	日 本心理学会	日 本保育学会	計
乳児の泣き声	1 (3.7)	2 (18.2)		3 (4.2)
初語言語発達	1 (3.7)	2 (18.2)	2 (6.1)	5 (7.0)
語 彙	5 (18.5)	1 (9.1)		6 (8.5)
文の理解・文法	7 (25.9)	1 (9.1)		8 (11.3)
作話・口頭詩・口頭作文	2 (7.4)	1 (9.1)	1 (3.0)	4 (5.6)
比 喩	2 (7.4)			2 (2.8)
ことばのやりとり・伝達	2 (7.4)	1 (9.1)	11 (33.3)	14 (19.7)
発話の特性	2 (7.4)			2 (2.8)
文 字	1 (3.7)		1 (3.0)	2 (2.8)
絵本	2 (7.4)	1 (9.1)	8 (24.2)	11 (15.5)
読書・語り物語			2 (6.1)	2 (2.8)
保育者のことばかけ			4 (12.1)	4 (5.6)
「言語」の保育内容			3 (9.1)	3 (4.2)
そ の 他	2 (7.4)	2 (18.2)	1 (3.0)	5 (7.0)
計	27	11	33	71 (100.0)

この領域においては、日教心、日心での発表は、どちらかと言えば、実際の保育の場から切り離されたところでの理論的言語研究が多いが、日保での発表は、保育者との言語的やりとり、及び保育の中での実践的言語研究が多い。

なお、「文字」に関する研究が少ないことは淋しい。

④学習

「学習」の領域での発表は、全体で10件で全発表件数の1.8%にすぎない。ここでは、「弁別・移行学習」とか「同一・差異学習」といった〇〇学習と銘うった研究のほか、「予測活動」「仮説行動」といった予測的情報の処理に関する研究が注目を惹く。

なお、モデリング効果に関する研究は僅かに1件であった。

⑤表現

「表現」の領域での発表は、全体で27件で、全発表件数の4.9%である。しかも、その多くは日保での発表である。

内訳は、TABLE 5 に示されるように、全体としては「音楽・リズム」の分野が多く、「絵画・製作」の分野では、描画行動に関する研究が殆どで、日保では一部、造形論が発表されている。

TABLE 5 「表現」の研究分野

()の数字は%

研究分野	日本教育心理学会	日 本心理学会	日 本保育学会	計
音楽・リズム	1 (20.0)	1 (100.0)	15 (71.4)	17 (63.0)
絵 画・製 作	4 (80.0)		6 (28.6)	10 (37.0)
計	5	1	21	27

⑥人格

「人格」の領域での発表は、全体で23件で、全発表件数の4.2%である。3学会、ほぼ均等な件数である。

内訳としては TABLE 6 に示されているように、「気質・性格」の分野が47.8%で最も多く、その中には、子どもの性格特性と母親の性格特性との類似性、性格特性と他の心理特性との関係に関する研究も含まれている。

TABLE 6 「人格」の研究分野

()の数字は%

研 究 分 野	日本教育心理学会	日 本心理学会	日 本保育学会	計
気 質・性 格	2 (22.2)	3 (60.0)	6 (66.7)	11 (47.8)
自己意識・自我	3 (33.3)		1 (11.1)	4 (17.3)
性役割意識・行動	1 (11.1)	1 (20.0)	1 (11.1)	3 (13.0)
セルフ・コントロール	3 (33.3)		1 (11.1)	4 (17.3)
機 動		1 (20.0)		1 (4.3)
計	9	5	9	23

なお、「セルフ・コントロール」の問題は、就学能力という今日の問題との関連からも、幼児研究において、重要な問題として、今後、もっと多くとりあげられてよ

い問題だろう。

⑦社会的行動

TABLE 7 「社会的行動」の研究分野 ()の数字は%

研究分野	日本教育 心理学会	日 本 心理学会	日 本 保育学会	計
乳児と大人とのやりとり	6 (24.0)	2 (50.0)		8 (16.7)
基本的生活習慣			4 (21.1)	4 (8.3)
社会的ルール概念		1 (25.0)	2 (10.5)	3 (6.3)
模 倣	4 (16.0)			4 (8.3)
競争・協同・けんか	3 (12.0)		1 (5.3)	4 (8.3)
社会性感情	1 (4.0)		3 (15.8)	4 (8.3)
愛他的行動・共感	8 (32.0)	1 (25.0)	3 (15.8)	12(25.0)
社会性一般			5 (26.3)	5(10.4)
対仲間関係のタイプ	2 (8.0)			2(4.2)
そ の 他	1 (4.0)		1 (5.3)	2(4.2)
計	25	4	19	48

「社会的行動」の領域での発表は、全体で48件で、全発表件数の8.8%である。日心での発表件数が若干少ない。

ここでの顕著な分野は、TABLE 7 に示されているように、「愛他的行動・共感」と「乳児と大人とのやりとり」である。この2つの分野は、ここ数年の間に、急速に多くとりあげられるようになったテーマである。愛他的行動については、日保では、その指導実践面での研究も含まれている。「乳児と大人とのやりとり」の分野では、言語的やりとりを除いており、それは、「言語」の領域に含めている。大人とのやりとりといっても、多くは、母親とのやりとりで、母親に対する注視行為、母親の呼びかけに対する応答性などがとりあげられている。

なお、村山貞雄を代表とする共同研究「幼児の成長発達と保育課程の問題」は、全国の幼児を対象とした大規模な実態調査であるだけに注目されるが、その一部が、今回、「生活能力の発達の研究」「幼児の社会性と感情の発達」という形で日教心と日保で発表されている。

⑧遊び

「遊び」の領域での発表は、全体で55件で、全発表件数の10.1%である。とくに、日保での発表が多い。

分野別では、TABLE 8 に示されているように、「玩具」との関わりの研究が最も多い。この中には、フレーベルの恩物、モンテッソリー遊具に対する理論的検討も含まれている。

「遊びの中の対人関係」の分野の研究の殆どは、対仲間交渉に関わるもので、一部、保育者との交渉に関わるものも含まれている。この分野の特徴的な傾向として、パーティンの分類によるひとり遊びの見直しが行われ始めているという点が挙げられよう。

TABLE 8 「遊び」の研究分野 ()の数字は%

研究分野	日本教育 心理学会	日 本 心理学会	日 本 保育学会	計
玩 具	3 (33.3)		11(26.8)	14(25.5)
役割遊び・象徴遊び・ごっこ遊び	1 (11.1)	1 (20.0)	5(12.2)	7(12.7)
遊びと他の能力との関係	2 (22.2)		5(12.2)	7(12.7)
遊びの中の対人関係		4 (80.0)	7(17.1)	11(20.0)
遊びの中のイメージ			5(12.2)	5(9.1)
伝 承 遊 び			5(12.2)	5(9.1)
遊びへの働きかけ効果	2 (22.2)		1(2.4)	3(5.5)
シンポジウム	1 (11.1)			1(1.8)
そ の 他			2(4.9)	2(3.6)
計	9	5	41	55

その点では、飯島婦佐子の「縦断法による幼児の対人行動の分析」(日教心)は、42名の幼児について、3年間にわたって追跡したもので興味深い。

「遊びと他の能力との関係」については、幼児教育において、重要な分野であるだけに、もっとバラエティのある研究が望まれる。日教心で、シンポジウム「遊びによって学習するものは何か」(高橋たまき、祐宗省三、中沢和子、森上史朗、恩田彰、岡宏子)が行われた。

⑨生活構造

「生活構造」の領域での発表は、全体で僅かに8件で、全発表件数の1.5%にすぎない。

今日、子どもの生活リズムの乱れを指摘する発言が、教育・保育界で多いわりには、その実証的な心理学的研究が少ない。

⑩家族関係

TABLE 9 「家族関係」の研究分野 ()の数字は%

研究分野	日本教育 心理学会	日 本 心理学会	日 本 保育学会	計
きょうだい関係	3 (15.8)	1 (10.0)		4(8.9)
母子関係・愛着・分離	7 (38.6)	8 (80.0)	3 (18.8)	13(28.9)
母性意識・養育態度	6 (31.6)		8 (50.0)	14(31.1)
乳幼児期の親子関係の影響			3 (18.8)	3(6.7)
子どもの心理特性と親要因		1 (10.0)	1 (6.3)	2(4.4)
シンポジウム	1 (5.3)			1(2.2)
そ の 他	2 (10.5)		1 (6.3)	3(6.7)
計	19	10	16	45

「家族関係」の領域での発表は、全体で45件で、全発表件数の8.2%である。

分野としては、TABLE 9 に示されているように、「母性意識・養育態度」の31.1%と「母子関係・愛着・分離」の28.9%が際立って多い。最近、母性本能論、父や他の保育者との関係を抜きにした母子関係論が、いろいろな所で議論されているが、もっと、多くの具体的資料

に基づく議論がなされる必要がある。その点で、日本教育学会での堀尾たちの共同研究「『子どもの発達と母親の意識に関する調査』の結果と分析(上)(下)」(堀尾輝久、庄司洋子、汐見稔幸、片岡洋子、滝口美智代、一見真理子)保育情報 No.102, 103, 1985 は、資料として興味深い。

また、母子相互交渉については、母親から子どもに向けられた影響という観点での研究が多いが、同時に、子どもの側の特性が母親の養育行動にどのような影響を与えるかという観点での研究も重視されなければならないだろう。

なお、日教心で、シンポジウム「発達と社会的相互作用——子どもの発達に及ぼす母子愛着関係の影響をめぐって——」(田島信元、三宅和夫、臼井博、中野茂、金谷有子、高橋恵子、古澤頼雄)が行われた。

⑩保育効果

「保育効果」の領域での発表は、全体で16件で、全発表件数の2.9%である。

ここでは、自由保育、一斉保育、集団保育、家庭保育、演劇保育、芝生保育等、さまざまな保育形態の中での子どもの行動が扱われている。

概して、実践記録的な記述の発表論文が多い。その中で、飯島婦佐子の「幼児の自主性——倉橋理論実践園対一斉保育中心園——」(日心)と村山貞雄を代表者とする共同研究「幼児の成長と保育課程の調査」の一部としての島田信秀、松田君彦、大坪治彦たちの「人格形成に及ぼす環境要因の分析(8)」(日教心)は、資料として貴重である。

⑪保育者特性

「保育者特性」の領域での発表は、39件で、全発表件数の7.1%である。しかも、その中、30件が日保での発表である。

TABLE 10 保育者・養育者特性

()の数字は%

研究分野	日本教育 心理学会	日本 心理学会	日本 保育学会	計
保育及び保育者観	3(75.0)	1(20.0)	8(26.7)	12(30.8)
保育学生の実習	1(25.0)		7(23.0)	8(20.5)
保育学生の知性・表現力			6(20.0)	6(15.4)
保育者の資質・養成			6(20.0)	6(15.4)
妊婦の意識		4(80.0)		4(10.3)
幼児関連に対する意見			2(6.7)	2(5.1)
その他			1(3.3)	1(2.6)
計	4	5	30	39

分野としては、TABLE 10 に示されるように、「保育及び保育者観」に関する発表が最も多く、その中には、

男性保育者の意識に関する調査も含まれている。

「保育学生の実習」の分野では、実習体験後の学生自身の保育に対する意識の変容を問題とした研究が多い。

「保育学生の知性・表現力」の分野では、将来、保育にたずさわる保育学生の現在の自然認識の実態や4本足のにわとりを描く学生などが扱われていて面白い。

⑫臨床・障害

「臨床・障害」の領域での発表は、全体で90件で、全発表件数の16.5%を占め、最も多い。TABLE 11 は、どのような障害及び問題行動をもった幼児が研究対象になっているかを示したものである。それによれば、「精神発達遅滞」と「言語発達遅滞」及び「自閉的傾向」の3つの分野で、ほぼ、全体の50%を占めている。

なお、表中で、「複数種類の障害児」と分類した分野は、1つの研究発表で、たとえば、自閉症児とかダウン症児といったさまざまな障害児が扱われた研究の件数を示すもので、同一の子どもが複数の障害をもった「重複障害」とは区別される。「その他」の分野には、「視覚障害」「プラウダー・ウィリオン症候群」「ダウン症」「肢体不自由」「唇裂口蓋裂」「筋ジストロフィー」「場面緘黙症」「頻尿・遺尿」「表情の乏しさ」「非社会的行動」が各1件含まれている。

シンポジウム「乳幼児発達診断・相談をめぐる心理学と医学の対話」(古澤頼雄、小林登、中島誠、上田礼子、三宅和夫、深谷和子、加藤忠明)がそれぞれ医師、保健婦、サイコロジストの立場から日教心で討論された。

なお、単に、障害児とあるだけで、具体的にどのような障害をもった子どもを扱っているのか、少なくとも、発表論文からは判断しかねる発表件数が15件の16.7%で、意外と多かった。とくに、日保での発表に多い。

TABLE 11 「臨床・障害」の研究分野

()の数字は%

障害及び問題行動の種類	日本教育 心理学会	日本 心理学会	日本 保育学会	計
精神発達遅滞	7(17.5)	5(25.0)	5(16.7)	17(18.9)
言語発達遅滞	5(12.5)	4(20.0)	3(10.0)	12(13.3)
聴覚障害	4(10.0)			4(4.4)
自閉的傾向	6(15.0)	3(10.0)	6(20.0)	15(16.7)
重複障害	2(5.0)	3(10.0)		5(5.6)
複数種類の障害児	5(12.5)		3(10.0)	8(8.9)
登園拒否・欠席状況	1(2.5)		1(3.3)	2(2.2)
不明	3(7.5)		12(40.0)	15(16.7)
シンポジウム	1(2.5)			1(1.1)
その他	6(15.0)	5(25.0)		11(12.2)
計	40	20	30	90

* 日教心での「登園拒否」の発表1件は、本資料の分析後、発表取消しであることが判明した。

⑭発達理論・研究方法

「発達理論・研究方法」の領域での発表は、全体で15件で、全発表件数の2.7%である。

15件中、テスト作成に関する研究が6件、方法論が2件で、その他は、学者の具体名を冠せられた発達理論に対する批判的検討である。それらは、ピアジェ、ハント、ポルトマン、ハイム・ギノットの理論である。

3. どのような研究方法が用いられているか。

乳幼児研究においてどのような研究方法が用いられているか、その分類及びその種別毎の発表件数を示したものがTABLE 12である。

表内で「日誌・記録文書分析」とあるのは、日誌法と共に子どもに関する文献の分析及び保育者の実践記録の分析が含まれる。「縦断研究」は、個々の被験児を事例として追跡したのではなくて、多数の、しかも同一の被験児について、全体として長期間、追跡した場合を意味している。「事例研究」については、少数の被験児について、追跡的に扱った場合を「縦断的」、ある条件の下で、ある時点だけにおいて扱った場合を「横断的」と分類した。

事例研究においては、実際は、個々の研究において「実験法」とか「観察法」「検査法」あるいは「併用

といったさまざまな方法が用いられるわけだが、本稿ではそこまで分析せず、一括して「事例研究」として扱った。

なお、「論」とあるのは、方法論も含まれるが、必ずしも、それだけではない。発表論文それ自体が、当該研究領域に関わった論の展開となっているものをも含めている。

さて、ここで、研究方法の採用状況の特徴について概観してみよう。

1) 全体的には、「実験法」と「事例研究」が際立つ

TABLE 12 研究方法の種類別発表件数

()の数字は%

研究 方法 の 種 類	発 表 件 数
実 験 法	139 (25.4)
観 察 法	36 (6.6)
調 査 法	99 (18.1)
検 査 法	53 (9.7)
日誌・記録文書分析	28 (5.1)
縦 断 研 究	10 (1.8)
事例研究 { 縦 断 的	95 (17.4)
横 断 的	32 (5.9)
複数方法の併用	17 (3.1)
論	38 (6.9)
計	547 (100.0)

TABLE 13 研究方法別研究領域

()の数字は%

研究領域 研究方法	身体・運動	認知	言語	学習	表現	人格	社会的行動	遊び	生活構造	家族関係	保育効果	保育者特性	臨床・障害	発達研究 理論法	計
実 験	1 (0.7)	51 (36.7)	23 (16.5)	10 (7.2)	6 (4.3)	8 (5.8)	18 (12.9)	4 (2.9)		5 (3.6)	2 (1.4)	3 (2.2)	7 (7.2)	1 (0.7)	139 (100.0)
観 察			3 (8.3)		3 (8.3)		3 (8.3)	18 (50.0)		5 (13.9)	1 (2.8)	1 (2.8)	2 (5.6)		36 (100.0)
調 査	3 (3.0)	3 (3.0)	6 (6.1)		6 (6.1)	3 (3.0)	13 (13.1)	3 (3.0)	7 (7.0)	12 (12.1)	6 (6.1)	30 (30.3)	7 (7.0)		99 (100.0)
検 査	15 (28.3)	5 (9.4)	1 (1.9)		1 (1.9)	2 (3.8)	1 (1.9)		1 (1.9)	3 (5.7)	1 (1.9)	4 (7.5)	14 (26.4)	5 (9.4)	53 (100.0)
日誌・ 記録文書	6 (21.4)		2 (7.1)		1 (3.6)	1 (3.6)	3 (10.7)	8 (28.6)		2 (7.1)	1 (3.6)		4 (14.3)		28 (100.0)
縦断研究	1 (10.0)		3 (30.0)			2 (20.0)		1 (10.0)		3 (30.0)					10 (100.0)
事例研究 縦断的		4 (4.2)	15 (15.8)		5 (5.3)	1 (1.1)	6 (6.3)	8 (8.4)		5 (5.3)	2 (2.1)		49 (51.6)		95 (100.0)
横断的	1 (3.1)		9 (28.1)		3 (9.4)	1 (3.1)	3 (9.4)	3 (9.4)		4 (12.5)	1 (3.1)	1 (3.1)	6 (18.8)		32 (100.0)
複数の方法 併用	3 (17.6)		2 (11.8)			4 (23.5)		1 (5.9)		5 (29.4)	2 (11.8)				17 (100.0)
論	4 (10.5)	3 (7.9)	7 (18.4)		2 (5.3)	1 (2.6)	1 (2.6)	9 (23.7)		1 (2.6)			1 (2.6)	9 (23.7)	38 (100.0)
計	34	66	71	10	27	23	48	55	8	45	16	39	90	15	547

て多く採用されており、それぞれ25.4%, 23.3%で全研究法の50%近くを占めている。次いで、「検査法」の9.7%, 「観察法」の6.6%, 「日誌法及び記録文書の分析」の5.1%, 「複数方法の併用」の3.1%, 「縦断研究」の1.8%の順となっている。

2) 各研究方法はどんな研究領域で採用されているかを示したのが TABLE 13 である。

①実験法は「認知」において最も多く、次いで「言語」であり、「学習」を加えると、知的領域で60.4%を占めている。

②観察法は「遊び」だけで50%を占めている。

③調査法は「保育者特性」の30.3%が最も多い。

④検査法は「身体・運動」と「臨床・障害」においてほぼ同じ採用状況で、2つの領域合わせて54.7%である。

⑤日誌法及び記録文書の分析は「遊び」において最も多く、28.6%であり、次いで「身体・運動」「臨床・障害」「社会的行動」の順に多い。

⑥縦断研究は「言語」と「家族関係」でそれぞれ30%,

合わせて60%を占めている。

⑦事例研究は「臨床・障害」で最も多く、43.3%を占めている。次いで「言語」の18.9%である。

⑧複数方法の併用は「家族関係」の29.4%が最も多く、次いで「人格」の23.5%, 「身体・運動」の17.6%が多い。なお、同一研究の中で、複数方法の併用は、実際はもっと多いと思われるが、発表論文をみる限りにおいては、ここで示された数字しか読みとれなかった。

3) 各研究領域はどんな研究方法を採用しているかを示したのが FIG. 1 である。

①「身体・運動」では検査法が44.1%で最も多く、次いで日誌法等の17.6%。観察法は採用されていない。

②「認知」では実験法が圧倒的に多く、77.3%を占めている。

③「言語」では事例研究法の33.8%, 実験法の32.4%が多く、この2つを合わせて66.2%である。ここでは全ての研究方法が採用されている。

④「学習」では実験法だけが採用されている。

数字は% 100%

研究領域	実験	調査	検査	観察	日誌等	縦断	事例	併用	論
身体・運動	2.9	8.8	44.1		17.6	2.9	2.9	8.8	11.8
認知	77.3						4.5	7.6	6.0 4.5
言語	32.4	4.2	8.5	1.4	2.8	4.2	33.8	2.8	9.9
学習	100.0								
表現	22.2	11.1	22.2		3.7 3.7		29.6		4.9
人格	34.8	13.0	8.7	4.3	8.7		8.6	17.4	4.3
社会的行動	37.5	6.3	27.0		2.1 6.3		18.8		2.1
遊び	7.3	32.8	5.5	14.5	1.8		20.0	1.8	16.4
生活構造		87.5							12.5
家族関係	11.1	11.1	26.7	6.7	4.4	6.7	20.0	11.1	2.2
保育効果	12.5	6.3	37.5	6.3	6.3		18.8		12.3
保育者特性	7.7	2.6	77.0					10.3	2.6
臨床・障害	7.8	2.3	7.8	15.6	4.4		61.1		1.1
理論・方法	6.7		33.3				60.0		

FIG. 1 研究領域別研究方法

⑤「表現」では事例研究法の29.6%, 調査法の22.2%, 実験法の22.2%が主なもので、これら3つで74%を占めている。

⑥「人格」では実験法の34.3%が最も多く、複数方法併用の17.4%, 調査法の13.0%の順に多い。観察法は採用されていない。

⑦「社会的行動」では実験法の37.5%, 調査法の27%, 事例研究法の18.8%の3つが多く採用されている。

⑧「遊び」では観察法が32.8%で最も多く、次いで事例研究法の20.0%, 日誌法等の14.5%が主要なものである。検査法は採用されていない。

⑨「生活構造」では調査法と検査法の2つだけの採用で、前者が87.5%を占める。

⑩「保育効果」では縦断研究を除いて全研究方法が採用されており、とくに、調査法の37.5%が顕著である。

⑪「保育者特性」では調査法が77.0%と圧倒的に多い。

⑫「臨床・障害」では事例研究法が最も多く、61.1%を占めている。

⑬「発達理論・研究方法」では、検査法の33.3%, 実験法の6.7%は全て実際のテスト作成に関わったものである。他の60.0%は発達論及び方法論である。

4) 新しい研究方法として期待されるもの。

日教心での自主シンポジウム『乳児保育』に関する発達研究の理論と方法をめぐって〔Ⅵ〕——保育園における観察研究の検討——(金田利子, 清水民子, 布施佐代子, 諏訪きぬ, 中原弘之, 中島常安)は、同じテーマで6回目を数えている。これまで、実践記録法、観察法の長所、短所が検討されてきた。実践記録法の限界として、①客観的関係がわかりにくい(子どもの配置が不明。記録者の目が一人に限られるなど)。②保育者と子どもの交流の事実は書いてあるが、その意図が書かれていない、の2点が指摘されている。観察法の問題点としては、第3者が入ることで、日常の保育をこわすということが挙げられている。方向としては、保育実践の目標や保育観と関わった保育の質との関連で観察がなされなければならないこと、また、研究の仮説を明確にしておくこと、たくさんの事例に基づいて一般化していくこと、などが指摘されている。まさに、その通りだと思う。

藤田統は「心理学におけるフィールド研究の意義について」(日心)において、行動の理解に際しては、種内の個体差という観点ではなくて、また、行動生起と変容の直接因の分析を狙うというのではなくて、進化の中の動物種という生態系の観点での観察と測定の必要性を説いている。

その意味では、ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」の観点から、研究者自ら、子どもたちの中に、彼らと同

等な役割(たとえば、電車ごっこの中での駅長の役)を担って入りこみ、子どもの自然の姿をそこなうことなく、ときに、彼らに働きかけ、その中で、子どもの行為の意図や意味を探っていこうとする「自然的実験」法が、幼児研究においてこそ、どんどん採用されていくことが望ましいだろう。

4. どのような年齢層の幼児が被験者として扱われているか。

TABLE 14 に示されるように、研究の被験者として扱われる幼児は、5, 6歳の年長児が最も多く、34.1%を占めている。次いで、2, 3歳児の年少児の20%, 4歳児の年中児の16.8%, 0歳児, 1歳児の乳児の9.7%の順である。

なお、単に「年長児」「年中児」「年少児」とだけで、年齢指示のない論文が目立つが、被験児が保育所児なのか、幼稚園児なのか、また、幼稚園児でも2年保育なのか3年保育なのかの違いによって、その呼び方にも違いがある筈なので、その点、明記して欲しかった。本稿では、「年長児」は5, 6歳児, 「年中児」は4歳児, 「年少児」は2, 3歳児として扱った。

今日、乳児の研究が、精密な観察・測定器具の開発のおかげもあって、既成の発達観をも変えさせるほどに、目覚ましい進展を示しているが、今のところ、情報の多くは医学面からのものが多い。心理学的アプローチの一層の活性化が望まれる。第2, 第3のバウアーの出現があっていいだろう。

表中で「7歳以上」とあるのは、3つのケースを含んでいる。1つは、同一研究の中で、乳幼児と同時に他の年齢層の者も、発達の比較の観点から被験者として扱われている場合である。第2のケースは、幼児の問題について、大人(多くは母親, 保育者, 保育学生)に尋ねるという形で、大人が被験者として扱われている場合である。第3のケースは、事例研究の場合で、被験者は、現時点では幼児期を終えているが、幼児期の過去に遡上って、発達過程が分析されている場合、その被験者は、現在の「7歳以上」の年齢カテゴリーと同時に、遡上ったときの幼児期の年齢カテゴリーにおいてもカウントされた。

乳幼児研究であっても、他の年齢層の子どもたちとの比較という、長い見通しでの発達の視点を欠いてはいけな

5. 事例研究で扱われている被験者の人数及び追跡期間はどれくらいか。

事例研究が全体の23.3%で、実験法と共に顕著に多い。

TABLE 14 研究領域別被験者年齢 ()の数字は%

	0-1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳以上	不明	計
身体・運動	4 (5.4)	6 (8.1)	9 (12.2)	15 (20.3)	21 (28.4)	12 (16.2)	7 (9.5)		74
認知	9 (5.1)	6 (3.4)	14 (8.0)	34 (19.4)	46 (26.3)	42 (24.0)	23 (13.1)	1 (0.6)	175
言語	20 (15.4)	13 (10.0)	8 (6.2)	22 (16.9)	32 (24.6)	13 (10.0)	22 (16.9)		130
学習			1 (4.3)	3 (13.0)	9 (39.1)	8 (34.8)	2 (8.7)		23
表現	3 (7.0)	6 (14.0)	3 (7.0)	6 (14.0)	9 (20.9)	6 (14.0)	9 (20.9)	1 (2.3)	43
人格	5 (8.3)	5 (8.3)	7 (11.7)	10 (16.7)	16 (26.7)	12 (20.0)	5 (8.3)		60
社会的行動	7 (13.5)	9 (17.3)	4 (7.7)	7 (13.5)	7 (13.5)	5 (9.6)	13 (25.0)		52
遊び	8 (7.5)	12 (11.3)	22 (20.8)	27 (25.5)	22 (20.8)	8 (7.5)	4 (3.8)	3 (2.8)	106
生活構造							6 (85.7)	1 (14.3)	7
家族関係	15 (21.7)	10 (14.5)	4 (5.8)	6 (8.7)	8 (11.6)	2 (2.9)	23 (33.3)	1 (1.4)	69
保育効果	2 (9.1)	1 (4.5)	1 (4.5)	2 (9.1)	3 (13.6)	1 (4.5)	8 (36.4)	4 (18.2)	22
保育者特性							39 (100.0)		39
臨床・障害	23 (11.0)	25 (11.9)	37 (17.6)	39 (18.6)	36 (17.1)	25 (11.9)	19 (9.0)	6 (2.9)	210
発達理論・研究方法	3 (20.0)	1 (6.7)	1 (6.7)	1 (6.7)	3 (20.0)	3 (20.0)	2 (13.3)	1 (6.7)	15
計	99 (9.7)	94 (9.2)	111 (10.8)	172 (16.8)	212 (20.7)	137 (13.4)	182 (17.8)	18 (1.8)	1025

それでは、そこで扱っている被験者の人数はどれくらいで、また、どれくらいの期間、追跡されているのか、ということが、研究の一般化の点から興味をもち、本稿では、この問題も分析の対象にしてみた。

被験者数については TABLE 15 に示されるように、1名が圧倒的に多く、全体の46%を占めている。次いで2名の17.5%であり、1名と2名を合わせて63.5%ということになる。たしかに、51名以上という多くの人数を対象とした事例研究もある。しかし、3.7%と少ない。

追跡期間は TABLE 16 に示されるように、1年が最も多く、25.7%、次いで7—11か月の14.3%、2年の12.4%、3年の10.5%の順である。1か月以内という短期間は2.9%、5年以上という長期間は1.9%と少ない。

追跡研究あるいは縦断研究といった場合、その期間の長さについてもつ一般的なイメージからすると、今回の分析対象となった研究では、いささか短いような気がする。1年以内というのが全体の60.1%を占めている。

発表論文を読む限りにおいては、今後、事例数を増やしていくのか、また、追跡期間を拡大していくのかという点は定かでない。成果を研究者みんなで共有し合うという観点で、「一般化」への具体的努力を期待したい。少数の事例で、「一般化」を行うためには、研究者自身の豊かな知識と経験、そしてしっかりとした知見に支えられた洞察力が必要であろう。

なお、被験児が研究者の子どもである場合は、そのことを明記して欲しい。予断と偏見といった主観的要因に

TABLE 15 縦断研究及び事例研究における被験者数 ()の数字は%

人 数	1	2	3	4	5	6—10	11—20	21—50	51—100	100—	不 明	計
発 表 件 数	63 (46.0)	24 (17.5)	11 (8.0)	12 (8.6)	2 (1.5)	8 (5.8)	5 (3.6)	6 (4.4)	2 (1.5)	3 (2.2)	5 (3.6)	137 (100.0)

TABLE 16 縦断研究及び縦断的事例研究における追跡期間

() の数字は%

期 間	0—1ヵ月	2ヵ月	3ヵ月	4ヵ月	5ヵ月	6ヵ月	7—11 ヵ月	1年	2年	3年	4年	5年—	不明	計
発表件数	3 (2.9)	2 (1.9)	2 (1.9)	7 (6.7)	4 (3.8)	3 (2.9)	15 (14.3)	27 (25.7)	13 (12.4)	11 (10.5)	4 (3.8)	2 (1.9)	12 (11.4)	105 (100.0)

ついてどのような扱い方をしたか、その経験も、みんな
で共有したいものである。

6. どのような研究体制のもとで研究がなされている か。

研究体制については、ここでは、研究が共同研究か、
それとも単独研究かという観点だけから、その実態をみ
てみることにする。

学会別、研究領域別、研究方法別にみたのが、それぞ
れ、TABLE 17, 18, 19 に示されている。

学会別では、日教心、日心、いずれも単独研究が共同
研究を発表件数において上まわっている。それに対して、
日保では、共同研究が単独研究を上まわり、しかも、
63.3%という多くの件数を占めている。

日保での共同研究の多くは、幼稚園教員、保育所保母
など現場の保育者同士だけの研究、及び保育者と大学の

TABLE 17 学会別研究体制

() の数字は%

	共同研究	単独研究	計
日本教育心理学会	73 (40.3)	108 (59.7)	181(100.0)
日本心理学会	41 (45.1)	50 (54.9)	91(100.0)
日本保育学会	174 (63.3)	101 (36.7)	275(100.0)
計	288 (52.7)	259 (47.3)	547

TABLE 18 研究領域別研究体制

() の数字は%

	共同研究	単独研究	計
身 体 ・ 運 動	26(76.5)	8(23.5)	34(100.0)
認 知	30(45.5)	36(54.5)	66(100.0)
言 語	32(45.1)	39(54.9)	71(100.0)
学 習	1(10.0)	9(90.0)	10(100.0)
表 現	10(37.0)	17(63.0)	27(100.0)
人 格	8(34.8)	15(65.2)	23(100.0)
社 会 的 行 動	26(54.2)	22(45.8)	48(100.0)
遊 び	24(43.6)	31(56.4)	55(100.0)
生 活 構 造	6(75.0)	2(25.0)	8(100.0)
家 族 関 係	32(71.1)	13(28.9)	45(100.0)
保 育 効 果	11(68.8)	5(31.3)	16(100.0)
保 育 者 特 性	28(71.8)	11(28.2)	39(100.0)
臨 床 ・ 障 害	45(50.0)	45(50.0)	90(100.0)
発達理論・研究方法	9(60.0)	6(40.0)	15(100.0)
計	288	259	547

TABLE 19 研究方法別研究体制

() の数字は%

	共同研究	単独研究	計
実 験	59(41.7)	81(58.3)	139(100.0)
観 察	22(61.1)	14(38.9)	36(100.0)
調 査	63(63.6)	36(36.4)	99(100.0)
検 査	31(58.5)	22(41.5)	53(100.0)
日誌・記録文書	12(42.9)	16(57.1)	28(100.0)
縦断研究	8(80.0)	2(20.0)	10(100.0)
事例研究 { 縦断的	50(52.6)	45(47.3)	95(100.0)
{ 横断的	19(59.4)	13(40.6)	32(100.0)
併 用	11(68.8)	6(37.5)	16(100.0)
論	14(36.8)	24(63.2)	38(100.0)
計	288	259	547

研究者との共同研究というスタイルである。なお、今回
は、参加人数及び発表者の所属機関については分析しな
かった。

研究領域別にみると、共同研究が顕著に多い領域は、
「学習」「表現」「人格」の3領域である。

これらの領域別研究体制は、どうやら、採用されてい
る研究方法の種類と関係があるようである。実験法が多
く採用される「認知」や「言語」「学習」「表現」「人格」
「遊び」などでは、単独研究体制がとられやすく、「身体
・運動」「生活構造」「家族関係」「保育効果」「発達理論
・研究方法」など調査法及び検査法が多く採用されてい
る領域では共同研究体制がとられやすいということが資
料から分る。

以上